

TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol. 95

漫画という表現力

企業人事・卒業生に聞く

アシックス/カシオ/日本テレビアート





2017年に菅田将暉主演で映画化もされた『帝一の國』(集英社)より

漫画表現力

多摩美には漫画学科はありませんが、漫画を表現の手段として活躍する卒業生が学科を超えて数多く生まれています。漫画という表現に至った経緯、手応えを感じた瞬間、その魅力や多摩美在学中に影響を受けたことなど、漫画で表現する卒業生に話を聞きました。

古屋兎丸 | 漫画家 [90年油画卒業]

何がしたいのかわからなかったが表現したいというエネルギーが溢れていた

バイト代を注ぎ込んで
映画や演劇を死ぬほど観た

漫画を描く楽しさを知ったのは小学生の頃です。単行本『禁じられた遊び』の表題作は中学3年生のときに描いた作品で、当時は漫

画家になりたいと思っていました。でも、高校以降は漫画から離れていくことになります。最初は高校デビューを目指してテニス部に入るも、ぎっくり腰になり断念。自分はやはり絵なのかなと考え出したときに美術部の先輩を好きになり、美術部に入部しました。その

先輩を追いかける形で美術予備校に通い、油絵学科を選んだことで、僕の進路は美大に決まりました(笑)。

結局、その先輩とは疎遠になってしまいましたが、同じ予備校で知り合った友達の影響でライブハウスに通い始め、丸尾末広先生の



左から：『Palepoli』（太田出版）、『ライチ☆光クラブ』（太田出版）、『帝一の國』（集英社）、自伝的作品が収録された『1985年のソドム』（太田出版）

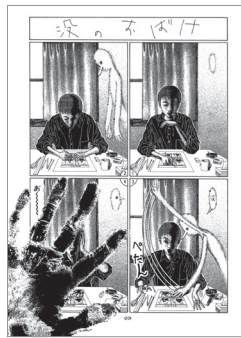
漫画と出会い、アンダーグラウンドの文化にどんどんハマっていきました。『ライチ☆光クラブ』の原作になった東京グランギニョルの舞台を見たのもその頃です。さまざまな作品に感化され「自分も表現がしたい」と多摩美に進学。入学後もバイト代を注ぎ込んで、映画や演劇を死ぬほど観ました。そこで培われた作品に対する価値基準のようなものは、今の創作活動の下地になっています。『ライチ☆光クラブ』は、まさに80年代当時の雰囲気を感じ込めるようにして、そのときの自分を喜ばせるつもりで描きました。当時のアンダーグラウンドな匂いは、いまだに自分に染みついている感覚があります。

手応えのない表現活動の中で 思い至ったのが好きな漫画

多摩美時代には演劇やダンスにのめり込み、立体作品やインスタレーションといった表現活動をしていました。何がしたいのかわからずとも、何かを表現したいというエネルギーだけは溢れていましたね。周りには僕のような学生がたくさんいて、思い切り表現活動ができました。また、李禹煥（リ・ウファン）先生や海老塚耕一先生の展覧会、東野芳明先生の講義の記憶は今も鮮明に残っています。アートを通して先生方の生き様を見せてもらったことは、大きな刺激になりました。

漫画家への思いが再燃したのは、大学卒業後の24歳のときです。当時は素材となる人工物をそのまま置か組み合わせるかするような「もの派」に傾倒していました。でも手応えがないまま表現活動を続けるなかでふと「僕はもともと何が好きで美大に入ったんだっけ？」と考えたんです。そこで思い出したのが、子どもの頃から好きだった漫画でした。漫画なら単行本1冊くらい出せるかもしれないという思いで、その日から1日何時間も漫画を描き続ける生活が始まりました。

デビュー作の『Palepoli（パレポリ）』は、美大出身らしいアートの技法や発想で勝負した作品であり、同時に「美大の呪縛」から解放される通過儀礼的な作品でもありました。アートの手法を過剰に使ったのは、ポップで漫画らしい絵は描けない自分は、美術で勝負するしかないと思ったからです。加えて「紙にコマを割って物語を描くってどういう意



『Palepoli』より、自身の手のコピーを使ったという作品

味？」と美大生特有のこじらせ方をしていたこともあり、漫画とは何かを漫画で問うものになりました。これは当時の自分だからこそ描けたものだと思います。

アート志向が強かったとはいえ、『Palepoli』で女神の女の子をかわいく描けた経験は、美少女が主人公の『ショートカット』の創作に繋がりました。デビューから今日まで一貫して、僕はそうやって作品を描きながら可能性を引き出し、描ける範囲を広げてきました。一方で、24歳から30年近くずっと漫画を描き続けてきた今、そろそろ自分を見つめ直す時期にあるのかなと感じています。これからは表現者としての終活も視野に入れながら、自分の生き方と作風に向き合っていくつもりです。



1968年東京都生まれ。1994年に「月刊漫画ガロ」（青林堂）に掲載された『Palepoli（パレポリ）』で漫画家デビュー。独自の作風や人間の暗部を描く作品が若者を中心に支持されている。代表作に『ライチ☆光クラブ』（太田出版）、『帝一の國』（集英社）、『女子高生に殺されたい』（新潮社）など。

2023年9月8日「古屋兎丸 特別講義」開催

古屋兎丸×竹熊健太郎 創作の原点や多摩美時代を語る

90年油画卒の古屋兎丸さんによる特別講義が、9月8日に開催されました。大学のAホールには多くの学生が聴講に訪れ、立ち見がたくさん出るほどの超満席となりました。

特別講義は、古屋兎丸さんと、多摩美で「漫画文化論」を教える竹熊健太郎先生の対談形式で実施。8月発売の『古屋兎丸短篇集 1985年のソドム』の表題作で自叙伝的に描かれている創作活動のルーツや、多摩美時代のエピソードについて語っていただきました。

多摩美で学んだもの派による表現への懐疑的な視点から、デビュー作『Palepoli（パレポリ）』のアートの表現技法が生まれたという裏話も。

対談後の質疑応答では、学生の等身大の質問一つひとつに真摯に回答してくださった古屋先生。「多摩美にはどんな人や表現も温かく迎え入れてくれる環境があります。この4年間は恥ずかしがらずに、思い切り自分の表現を出し切ってもらえたらと思います」と学生への励ましの言葉で最後を締めくくりました。



学生時代にアフタヌーン四季大賞を受賞しデビュー ゲームや絵本へと広げていった表現の幅

クリハラタカシ | 漫画家 / イラストレーター / 絵本作家 [01年グラフィックデザイン卒業]

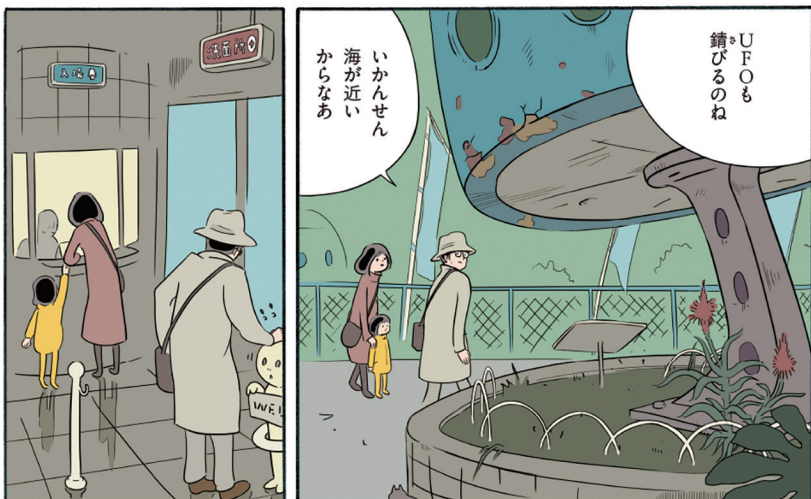
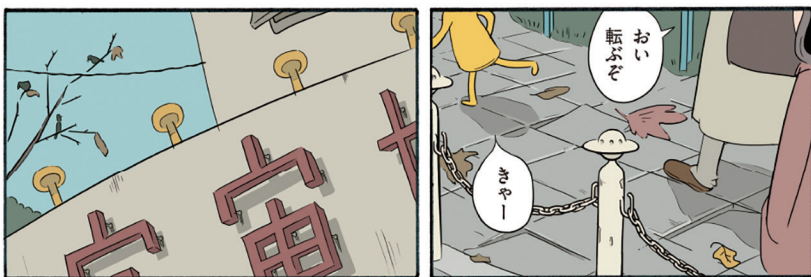
アニメーションの授業 → ゲーム会社 → 漫画や絵本、イラストレーション制作へ

漫画には たくさんの幸せな瞬間を並べたい

漫画を描き始めたのは、小学校低学年のときに読んだ長新太さんの『なんじゃもんじゃ博士』がきっかけです。それまで自分が世の中に期待していた面白さの上限を遥かに超えていました。予想のつかない展開が次々と起こるんですが、シンプルな線で表現されていて「自分にも描けそう!」とすっかり思わせ

てくれるところも重要でした。それからコマ割りをした漫画を描くようになりました。藤子不二雄^④先生の『まんが道』を読んで漫画家に憧れたりして。でも中学生になる頃には、自分の下手さに嫌気がさして漫画を描くことからは遠ざかっていました。その間も落書きはずっとしてましたけど。転機になったのは、高校2年生冬の進路選択の時期です。進路を考えるにあたって、「やはり人生で一度くらい雑誌に掲載されるよう

な漫画を描いてみたいな」という夢が蘇ってきて。美大を受験したのは、その過程で漫画に役立つ技術を学べると思ったからでした。大学2年生の1年間をかけて『アナホルヒトビト』という短編漫画を描きました。運良くこの作品で賞をいただき、雑誌に掲載されるという夢は叶いました。でも全力を出した分、自分に足りないものがたくさん見えてしまい、立て直すためにしばらくまた身動きが取れなくなったりして。雑誌には掲載されたものの、



左:『冬のUFO・夏の怪獣【新版】』(ナナロク社)、
右上:『ツノ病』(青林工藝舎)、右下:『ゲナポッポ』(白泉社)



職業としての漫画家になれるとは全く思っていませんでした。今でもそうですが。

そんなとき、大学でアニメーションの授業が新しく始まりました。担当教諭の片山雅博先生^(※1)は、膨大な量の世界の短編アニメーションを見せてくれました。アニメーションを制作する課題も出ましたが、ほかの授業の課題とは違って遊ぶような感覚で夢中で取り組んでいました。片山先生はとにかく褒めてくれるので、後半は「その褒めには騙されないぞ!」と思いつつ夢中になっていました。

この授業では、後に『つみきのいえ』^(※2)でアカデミー短編アニメ賞を受賞する加藤久仁生君と出会えたのも大きかったです。今考えると恐れ多いのですが、共同で『ROBOTTING』というアニメーションを制作したのは大切な思い出です。加藤君以外にも同世代の、まだ世の中に出ていない天才がふらっと身近にいて、その才能を間近で見られたのが大学に行く意味のひとつだったと思います。

大学卒業後はゲーム会社に就職しました。最初は広告系を受けていたのですが全然ダメで、改めてポートフォリオを見返したら「ゲーム会社向きだな」と気がついて。例えば、漫画やアニメーションは、キャラクターを考える際にストーリーや設定、動きや演出など全部込みで考えるんですけど、ゲーム制作にそれが役立ったんですね。

ゲーム会社には高橋慶太さんというこれまた大天才がいて、『塊魂』^(※3)というゲーム

のプロジェクトに参加させてもらいました。この『塊魂』があまりにも素敵な企画な上に、自分の趣味や能力を全開で発揮できるものだったので、とてもやりがいがありました。だからこそ「今後、ゲーム業界にいてもこれほど幸せな仕事に出会えることはないな」とも思ってしまった。成仏してしまっただけです。会社勤めの間も副業でイラストレーションや漫画、アニメーションの仕事はポツポツと続けていましたが、これからはそちらに軸足を移していこうかなと思いついて退社しました。自分みたいなタイプは、会社にいたらいずれお荷物になりそうですし。

今も絵本やイラストなどいろいろやっていますが、やはり自分にとっての創作の原点は漫画で、芯となる表現方法だと思っています。なんでそんなに漫画が好きなのか考えたんですけど、ページをパッと開いたときにたくさ

ん絵が並んでいるのが、贅沢で幸せな気持ちになるんですね。コマに区切られて、皆さんの景色や瞬間や人が一枚の紙に並んでいる。漫画には幸せな瞬間を並べたいと思います。



1977年、東京生まれ。グラフィックデザイン学科在学時にアフタヌーン四季大賞を受賞しデビュー。主な著書に漫画『ツノ病』(青林工藝舎)、『冬のUFO・夏の怪獣【新版】』(ナナロク社)、漫画絵本『ゲナボッポ』(白泉社)、絵本『これなんなん?』(くもん出版)など。現在コミブレにて『余談と怪談』を連載中。

(※1) 片山先生はお亡くなりになられ、現在は野村辰寿教授に引き継がれています



(※2) 同期の加藤久仁生監督による『つみきのいえ』(2008)。アカデミー賞短編アニメーション賞を受賞



(※3) ナムコで制作に関わったゲームソフト『塊魂』(2004)

*ナムコ=現バンダイナムコエンターテインメント

「古屋兎丸 特別講義」担当教授に聞く 芸術性と大衆性を持つ漫画と敬意を持って向き合う



石田尚志 先生
油画教授 特別講義担当

「表現の冒険」で 多彩なアートに触れる

多摩美の絵画学科油画専攻には2年次以降にクラス選択制の実技授業があり、学生がそれぞれの表現を掘り下げていくカリキュラムとなっています。この自由制作では、学生から漫画作品が提出されることもあります。漫画というアートと線引きされるものに思われるかもしれませんが、講評において漫画作品を軽くあしらうようなことは絶対にありません。漫画もひとつのアート作品として敬意を持って向き合い、作家視点と読者視点の2つの観点から評価を伝えるようにしています。

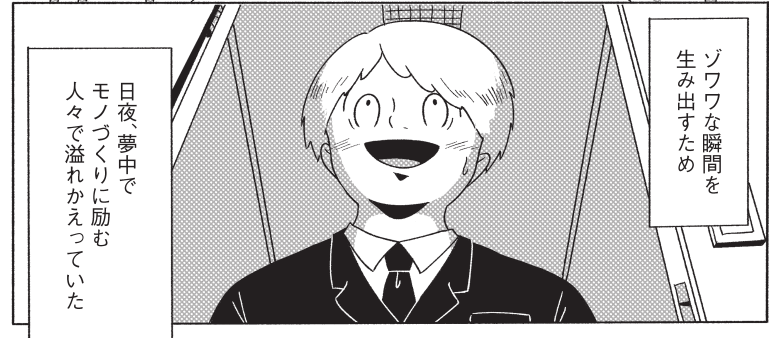
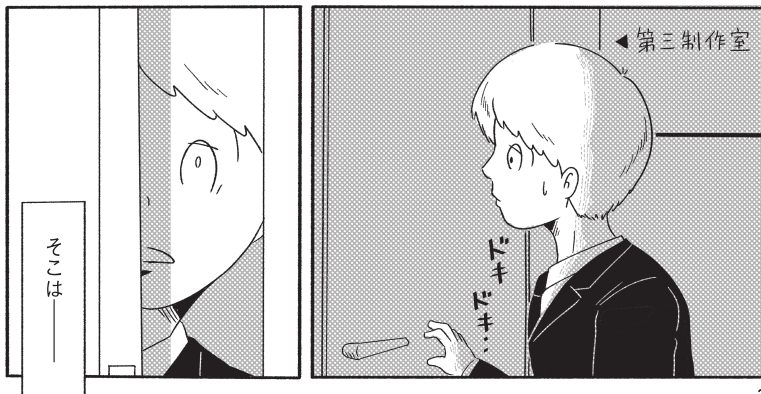
漫画学科のない多摩美では、漫画の描き方を直接的に教わる機会はありません。しかし、表現と向き合う姿勢はどんな創作活動にも通じるものです。絵画やグラフィックアートに限らず、彫刻や身体表現など異なるジャンルのアートに触れながらそれぞれのあり方を模索していく「表現の冒険」は、自身の表現の幅を広げてくれます。同時に、それは自分の創作活動を見つめ直すことにもつながります。さまざまな創作手法のなかで、なぜ自分は漫画を描くのか。そもそも表現とは何なのか。多摩美でさまざまなアートと接するなかで、じっくり向き合ってもらえたらと思います。

漫画家を目指す学生にとって、アートという文脈から漫画を捉え直し、表現の幅を広げていく経験はきっと大きな財産になるはずです。実際、在学中に編集担当がついたり漫画家デビューを控えていたりする学生ほど、学内では「漫画以外」の創作に取り組む傾向があるのは面白いところです。多摩美が多彩な漫画家を輩出してきた背景には、このようにさまざまな創作活動に挑戦しながら、自身の表現と徹底的に向き合える環境があると考えています。

誤解を恐れずに言うと、アートに携わる人間と

して「漫画という表現には敵わない」と感じることもあります。例えば、板垣恵介先生の『刃牙』シリーズひとつとっても、被写界深度の深さを感じさせる遠近法や空間の歪み、マニエリスム的な身体のねじれといった表現を駆使して描かれる格闘シーンは凄まじく、目を見張るものがあります。凝った技法や線画の美しさはもちろん、読み手を惹きつける物語性や文学性をも内包する漫画表現を前にすると、その豊かさに圧倒されます。漫画文化はある種の美術作品として高度で豊かな表現を持ちながらも、数百円あれば誰もが買えるような大衆文化として愛され続けています。僕はそれに畏敬の念を抱かずにはいられません。

たくさんの漫画作品が日本に溢れている今、表現者のほとんどが漫画の洗礼を受けていると言えるのではないのでしょうか。鳥獣戯画や葛飾北斎の作品に始まり、現代美術にも大きな影響を与えてきた漫画表現は、アートの歴史において無視できないものとなっています。これから漫画制作に取り組む学生には、今まで続いてきた漫画表現の文化・歴史の上に自分もいるのだという誇りと自負を持って、原稿と向き合ってもらいたいですね。



2023年8月に出版されたコピーライター時代の体験を漫画化した『ゾワワの神様』(©うえはらけいた/祥伝社)

フタをし続けた絵を描く仕事に 多摩美でようやく向き合えた

うえはらけいた | 漫画家 [18年グラフィックデザイン卒業]

漫画は一生をかけて取り組む 価値のあるものと実感

最初に漫画家になることを意識したのは、小学生の頃です。身体が弱かった僕は、家で漫画を読んだり絵を描いたりする時間が長く、漫画が生活の一部となっていました。初めて描いた漫画は、小学6年生の自由研究で描いた15ページほどの「織田信長の生涯」。その次に描き上げた漫画は多摩美の卒業制作で、中学生から28歳まではまったく漫画を描いていませんでした。中学生までは美術部で絵を描いていたのですが、高校では帰宅部になり、絵や漫画から離れてしまったんです。漫画を

描かなきゃという焦りを感じながらも、なんの努力もできていない毎日を送っていました。それもあって、高3の進路面談で「(漫画家は) 厳しいと思う」と先生に言われたときには、自分には才能がないんだとあっさり諦めてしまいました。美大に入学するにも勉強が間に合わない時期だったので、国際基督教大学(ICU)の人文科学科へ入学。卒業後は博報堂に入社し、コピーライターになりました。

就活で広告業界を選んだのは、漫画と同じく子どもの頃から好きだったテレビCMが理由です。正直、就職活動の際にも頭の片隅には「絵や漫画を仕事にしたい」という思いがありました。でも、美大を卒業していない自

ICUを卒業

- 博報堂のコピーライターに
- 多摩美へ編入
- デザイナーから漫画家へ

分はイラストやデザインをするのは難しいだろうと考え、クリエイティブな仕事の延長線にあるコピーライターの道へ進みました。

博報堂を退職して美大に編入することを決めたのは、新卒で働き始めて5年目の26歳のときです。美大出身のデザイナーの方や、副業で各々のクリエイティブを發揮して活躍している先輩方に触発された部分が大きかったですね。広告業界で憧れの存在だったアートディレクターの大貫卓也先生や、TUGBOATの川口清勝先生の授業を受けられることに惹かれ、多摩美への編入を決めました。まだ自分が漫画家になれるという確信を持ってなかったのですが、そのときは多摩美での学びを活かし

てデザイナーを目指そうと考えていました。それでも、自分の本当の気持ちにフタをして避け続けてきた「絵を描く仕事」によりやく向き合えた感覚がありました。

多摩美に入って感激したのが、学生がみんな自分の“好き”を突き詰めていること、そしてそれを表現するのを誰も笑わないことです。学生時代には、何かが下手くそだといじられたり、マニアックなものを好きだと笑われてしまう空気が少なからずあったように思います。しかし、多摩美ではみんなが自分の“好き”を堂々と表現していて、それを笑う人はいませんでした。それまで周りの目が気になり漫画に挑戦できずにいた僕も、その環境下で自分が本当に好きだった漫画表現に立ち返ることができました。卒業制作の漫画には苦

戦し、思い描いていた物語の半分も描けませんでした。が、「自分がやりたかったのはこれだ！」という思いが溢れてきたのを覚えています。自分にとって漫画は、一生をかけて取り組む価値のあるものだ実感しました。

卒業制作に取り組んでいた4年生の頃には博報堂からデザイナーの内定をもらっていたため、卒業後は博報堂に再就職しました。しかし、業務に追われながら漫画家を両立することは難しく、申し訳なくも半年で退職しました。その後は、サイバーエージェントでデザイナーとして働きながら漫画を描き続け、2020年の春に独立。その頃に描いた『コロナが明けたらしたいこと』が初の書籍化作品となり、2023年には『ゾワワの神様』が出版されました。漫画を描きたくても筆が進まず悶々として

いる人は、自分の内側に描きたいものを探すより、外側にいる誰かを思って描いてみるのもいいと思います。『コロナが明けたらしたいこと』は、何も描けずに焦っていたときに「コロナ禍の人々に向けて漫画で何ができるだろう？」と考えて生まれた作品でした。学生のみなさんに伝えたいのは、才能よりも純粋に何が好きかを信じてほしい、ということです。これは多摩美で教わったことでもあり、漫画家を一度諦めてしまった高校時代の自分に伝えたいことでもあります。自分の才能に思い悩んだり、周りの才能に怖気づいたりすることもありましたが、人生で大事なものは“何が好きか”。今はそう思っています。



2021年7月、初の書籍となる『コロナが明けたらしたいこと』(アスコム)が発売される



卒業制作として執筆した、遊園地の「としまえん」を題材にした漫画作品『としま伝』



1988年東京都生まれ。大学卒業後、株式会社博報堂に入社しコピーライターとなる。2015年に同社を退職。多摩美術大学グラフィックデザイン学科に編入。その後も広告会社で勤務しながら活動を続け、2020年に漫画家デビュー。著書に『コロナが明けたらしたいこと』(アスコム)、『ゾワワの神様』(祥伝社)など。

多摩美唯一の漫画の授業「漫画文化論」担当講師に聞く 多摩美生の創造力が宿る新しい漫画表現に期待



竹熊健太郎先生
講師 「漫画文化論」担当

漫画史の発展を紐解き 実験的な表現に挑む

私が担当する「漫画文化論」の講義は、1年を通して漫画史やアニメーション史への理解を深めていきます。前期では、手塚治虫作品や彼に影響を与えたディズニー作品を中心に講義し、後期ではそれ以降の劇画やガロ、宮崎駿監督作品といった漫画史、アニメ史の発展過程を検証していきます。そして最終課題では、学生自身が描いた漫画を提出してもらい講評します。

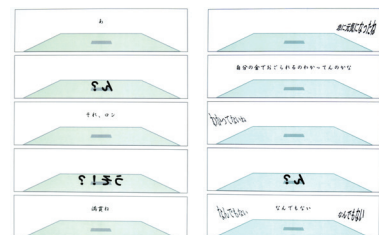
「漫画文化論」は漫画家志望ではない履修者が多いのですが、提出される漫画は、どれもレベルが高いものばかりです。漫画を描いたことばかりで

も各専攻での修行を積んだ学生が集まっているためか、ある種の作家性のようなものが作品に反映されているんです。ただ絵がうまいだけじゃない、簡単には思いつかないようなアイデアや技法を用いた作品が多い印象です。例えば、麻雀をテーマに簡潔な線とセリフだけで構成されている作品です。同作では、雀卓を囲む4人の会話の向きやフォントで見事に表現されていて、誰がしゃべっているのか、どんなやり取りなのかセリフの表現だけで理解できるようになっています。これは美大生が描く漫画ならではの面白い発想ですね。

大学の課題で描く漫画は、ビジネスとしての漫画とは違います。つまり売れるかどうかは考えずに、つくりたいものをつくれる。作品の完成度が高ければ評価されるのは美術大学の特権です。「漫画文化論」の講義では、商業誌だと門前払いされてしまいそうな作品でも、表現としての面白さを評価します。さらに多摩美の強みは、クリエイティビティの高い学生が集まっていることにあります。そういった環境だと周りに触発されて自分の表現レベルが上がるので、より完成度の高い作品づくりにつながると思います。

この講義で学生には「過去の作品」を知ってほ

しいと考えています。美術大学では、ポップカルチャーである漫画やアニメの歴史はあまり扱われません。しかし、ディズニー作品のような高いクリエイティビティには誰もが驚かされますよね。日本の漫画史を語るうえで、ポップカルチャーとしてのアート作品への理解は欠かせません。漫画やアニメを含め、これまでのアートの文脈を知ることで視野が広がり、新しいものを生み出すことができます。学生には漫画らしさという枠に捉われずに、漫画表現を通して自分のクリエイティビティを高めてほしいですね。



漫画文化論に提出された作品の一部は、竹熊先生が運営するオンライン・コミック・マガジン「電脳マヴォ」で読むことができます



漫画研究会（漫画部）は面白さを人と分かち合える場

しりあがり寿 | 漫画家 [81年グラフィックデザイン卒業]

喜国雅彦、しゅりんぷ小林らと
 過ごした漫画部、
 第2の黎明期

漫画表現の転換期を 仲間たちと過ごす

僕が漫画を描き始めたのは3、4歳のときでした。父親が漫画好きで、家にあった手塚治虫先生などの作品に影響を受けたんです。その後、絵画教室に通わせてもらったのですが、先生から「君の絵は漫画だ」と言われてしまい……（笑）。特にやりたいこともなかったので「漫画家になるしかないのかな」と考え、ひとまず芸術の知識を幅広く身につけようと多摩美に進みました。

当初、僕はバドミントン部に入っていました。美大の運動部ほど楽なものはないだろうと甘く考えていたのですが、そこでの練習が予想よりきつくて。そんなとき、漫画研究会（現 漫画部）が設立されるという校内放送が流れたんです。多摩美には以前も同様の研究会があったようなのですが潰れてしまったら

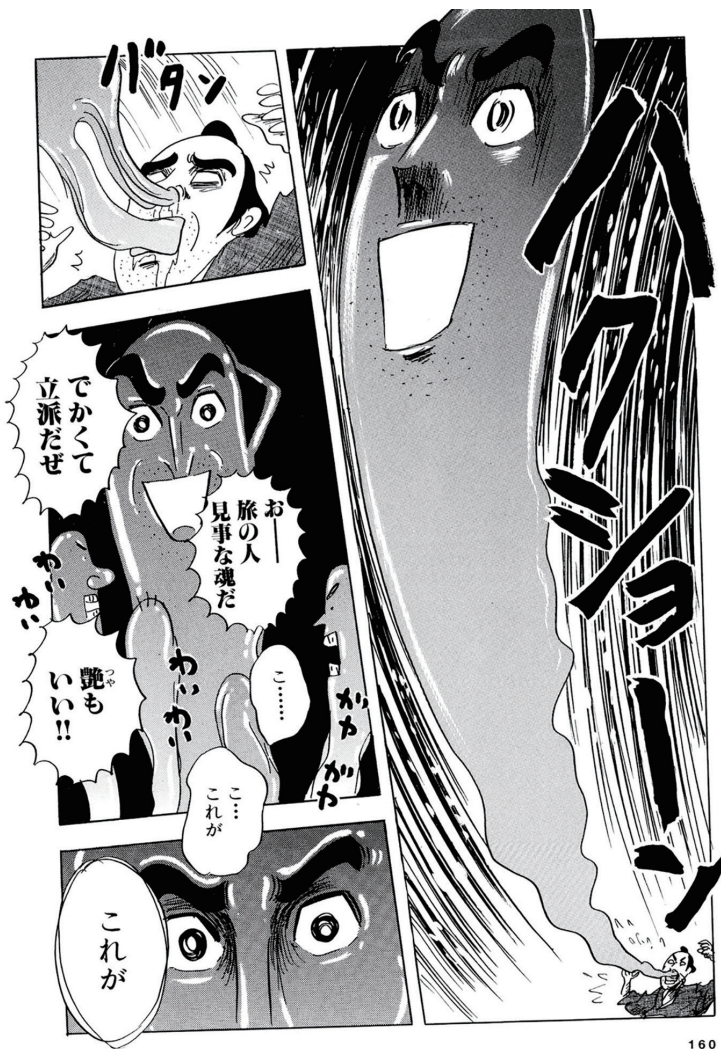
しく、新たにつくられることになった。それで、「バドミントンもいいけど、漫画も描きたい!」と放送を聞いてすぐに参加することを決めました。

僕が入学した1977年ごろは、ちょうど漫画が多様化の兆しを見せ始めた転換期でした。『ペンギんごはん』の湯村輝彦先生のように“ヘタうま”なタッチの漫画家も登場し、これなら自分にも面白い表現ができるんじゃないかと思えたんですよね。また、当時は広告産業が非常に盛んで、そちらの方面にも興味を持っていました。僕の中では漫画も広告も大きな違いはなく、ちょっと洒落ていて面白いことをやってみたいという気持ちでした。

漫画家の喜国雅彦は漫画研究会の同期で、しゅりんぷ小林などは先輩にあたります。後輩にはアートディレクターのサリー久保田やブックデザイナーの祖父江慎がいました。メンバーはプロ志向が強く、神矢みのるさんの



上・下:『弥次喜多 in DEEP 1』(KADOKAWA)





左から：しりあがりさんが所持していた当時の部誌や同人誌、『タンマ』第8号、しりあがりさんが部誌に掲載した当時の作品

喜国雅彦さんの『月光の囁き』
©『月光の囁き』喜国雅彦／小学館

ように雑誌で連載を持っている先輩も身近にいて、本当に刺激的な環境でした。研究会としての主な活動は『タンマ』という同人誌の制作でしたが、芸祭で風呂の道具をそのまま展示したり、合宿を全力で楽しんだり、漫画に関わらず、とにかく面白いことをしたいという気概に満ちた人ばかりだったのを覚えています。

大学を卒業して企業に就職した後も、漫画研究会の仲間と同人誌をつくることは続けていました。スーツで漫画を描いて、そのまま出社するというようなこともありましたね(笑)。自分たちのやっていることが何よりも面白いのだと信じて疑わない、本当に幸せな時間でした。当時、世の中にはまだ漫画化されていないテーマが山のようにあって、「どこから手をつけよう？」という状態だった。漫画が新しい可能性に溢れていたんです。

さまざまな創作活動を経た僕が実感している漫画の最大の強みは、コストに対して高い

表現力を持っていることだと思います。アニメや映画を制作するためには膨大な費用がかかるのに対し、漫画では紙とペンだけで同じ世界を表現することができる。当然、それだけトライアンドエラーがしやすく、優れた作品が生まれやすくなります。また、キャラクターの外見的特徴から大まかな性格が把握できたりと、長年にわたって集積された“お約束”のような共通認識が多く、読者に情報を伝えるスピードが速いことも漫画という表現ならではの魅力ではないでしょうか。

近年、漫画のレベルは格段に高くなっていると感じています。比例して、影響力も大きくなっている。そんな漫画を描く上で何より大切なのは、作者である自分や身近な人が思わず笑ってしまう作品であるかどうかだと思います。自分や周囲の人が面白いと思っていない漫画は、おそらく世の中にも響かないでしょう。その点、自分が面白いと思えるものを大事にできる場、また面白さを分かち合

える人との出会いの場として、漫画研究会は非常に重要だったと考えています。時代が変わってもその良さは受け継がれていると思うので、またここから新しいものが生まれてくるのではないかと期待しています。



1958年、静岡生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業後、キリンビール株式会社に入社。1985年に『エレキな春』(白泉社)で漫画家デビュー。ギャグ漫画を軸としながら文学的な作品を次々に発表し、アートなど多方面に創作の幅を広げる。2001年に『弥次喜多 in DEEP』(KADOKAWA)が第5回手塚治虫文化賞マンガ優秀賞を受賞。

漫画部部长に聞く

部員たちの切磋琢磨から熱量のある作品が生まれる



漫画部部长
柳亮太郎さん 絵画学科油画専攻3年

クリエイティブ領域で活躍する卒業生たち

漫画部(旧・漫画研究会)は、1976年の発足以来、個性的な漫画家を輩出してきた歴史あるサークルです。部室には何十年も前の漫画雑誌や過去の部誌「タンマ」のアーカイブが置いてあり、当時のおもかげと今日まで続いてきた伝統を感じられます。漫画部を卒業した先輩方の活躍は幅広く、プロの漫画家になった方はもちろん、大手ゲーム会

社のキャラクターデザインを手がけている方、就職して仕事をしながら表現活動を続けている方までさまざまです。縦の繋がりも強く、先輩やOB・OGの方に相談に乗ってもらうことも多いです。

現在は約50名ほどの学生が所属し、漫画を描いたり読んだり、好きな作品を語り合ったりと各々のペースで活動しています。入部するメンバーは、必ずしも漫画制作の経験者ではありません。部長である僕も、入部して初めて漫画を描きました。部員の多くに共通しているのが、漫画に限らず映画やアニメといったカルチャーに対する「好き」の熱量があることです。

2020年頃からのコロナ禍をきっかけに、部員同士がオンラインでコミュニケーションをとる機会がぐんと増えました。活動の場は時代とともに変化していますが、漫画部として変わらずに力を入れているのが、年2回発行の部誌「タマンガ」の制作です。有志が集まったメンバーの漫画作品を掲載し、コミックマーケットなどの即売会で販売

しています。タマンガの制作を通して、部員の漫画作品を初めて読むことも少なくありません。過去には30ページもの原稿をポンと持ち込んできた部員がいて、その熱量と作品のクオリティの高さに度肝を抜かれたこともありました。

普段の活動でも部員が描いた漫画原稿に触発されることは多いですね。漫画という表現は、作者の思いや考え、人やものに向ける視線といった“描いていない時間”が土台となっているように思います。だからこそ漫画作品には、作者の生き様が色濃く反映されるのではないのでしょうか。部員同士で切磋琢磨しながら、ときにはものすごい熱量や力量で描かれた作品に心動かされる体験ができるのは、漫画部における活動の醍醐味です。



2023年の夏に作られた『タマンガ』50号

メーカー

アシックス

「健全な身体に健全な精神があれかし」を創業哲学に、鬼塚喜八郎が1949年に神戸で創業した日本を代表するスポーツ用品メーカー。アスリート向けのシューズから街履きのスニーカーまで、スポーツで培った知的技術により質の高いライフスタイルを創造する。

お客様のニーズを 経験から「自分ごと化」することで 寄り添うデザインが生まれる



人事企画部組織・人材開発チーム

松田紗弥さん

アシックスには5つの事業カテゴリーがあり、それぞれにデザイナーが所属しています。そこで大切にしているのが「ストーリー」です。デザイナーはただ商品の外側をデザインするだけでなく、商品開発の構想段階から参加し、背景のストーリーからデザインしていかなければいけません。研究や企画のメンバーと直接やり取りをすることも多く、当社のデザイナーには、周囲を巻き込むコミュニケーション力や、プロジェクトを推進していく主体性を求めています。

多摩美の卒業生には、デザインのプロセスを重視している印象が一贯してあります。どうしてこのデザインにするのか、そのデザインをするうえで何が求められているのか。プロセスを言語化することが、授業を通して培われているのではと感じます。その姿勢は商品開発にも欠かせません。お客様のニーズを考え、お客様の視点に立ったデザインをするうえで、多摩美での学びが大いに役立っているのではないのでしょうか。

スポーツビジネスの世界では今後、マーケティングをはじめさまざまな分野で、デザイナーに求められる役割が大きくなっていくでしょう。ビジネスをクリエイティブの力で先導していく、そんな意識を持ったデザイナーに期待しています。

パフォーマンスランニングフットウェア統括部 デザイン部
スタビリティサイロデザインチーム

三宅大希さん

(12年プロダクトデザイン卒)

私が担当しているのは、楽しむことを目的に走る、ファンランナー向けのシューズです。最近だと「GEL-KAYANO 30」をデザインしました。アシックスの数あるシューズのなかでもロングセラーで、シリーズのちょうど30代目にあたります。長距離をストレスなく走れる安定的な「乗り心地」と、ランニングを始めようというお客様でも直感的に手を出しやすい、柔らかそうなデザイン。機能面とヴィジュアル面を掛け合わせるように表現しました。

アシックスのシューズには、お客様の視点に立ったデザインが求められます。私自身は陸上競技経験のないファンランナーでしたが、トライアスロン向けシューズを担当したときには、数ヶ月の練習を積んで大会にも出場しました。リサーチによって機能性は把握できても、トライアスロンのマインドまでは理解しきれません。具体的なシーンと機能の関連性や、疲労時に気持ちを上げるデザインの重要性。実体験からデザ

インすることによって、消費者にも共感してもらえるような一足に仕上げられたと思います。

直感的な表現や実体験の価値は、多摩美で学んだことでもあります。プロダクトデザインの授業では、擬音語をプロダクトに落とし込む課題が印象的でした。私が作ったのは「ぼよん」の言葉を起点にした懐中電灯。直感的な表現を試行錯誤した経験は、パソコンやスマートフォンの小さな画面でもお客様に魅力が伝わるようデザインするうえで、大いに役立っています。また、寺内隆先生（当時）の「自分が経験したことが一番説得力を持つ」という言葉も忘れられません。お客様のニーズを「自分ごと化」する姿勢は、いまでも私のデザインの指針となっています。

パフォーマンスランニングフットウェア統括部 デザイン部
コンビート&トレイルデザインチーム

木暮孝行さん

(13年造形表現学部デザイン卒)

学生時代から陸上競技をやっていた私は、マラソンを本格的に走る市民ランナーや、山を駆けるトレイルランナーなど、コアランナー向けのシューズをデザインしています。直近ではカーボンプレート入りのトレーニングシューズ「MAGIC SPEED 3」を担当しました。1秒でも速く、長く走れるように、軽量性と反発性を進化させ、機能性に対して正直にデザインを起こしています。タイムの追求には感情も重要な要素なので、気持ちを高ぶらせるようなヴィジュアルを心がけました。専門性の強い分野ですが、お客様の間口を狭めないためには、遊び道具みたいに使える直感的なデザインに仕上げることも求められます。

感情をベースにデザインしていく姿勢は、多摩美の植村朋弘先生（現・情報デザインコース教授）から受けた影響が大きいです。植村先生の授業はワークショップのようで、UX（ユーザーエクスペリエンス）デザインに近いものでした。正解となるプロダクトが最初に決まっているのではなく、感情から経験をデザインしていく刺激的なものばかり。カメラ片手に人々のニーズを取材し、その経験をプレゼンテーションしたこともありました。最後にはプロダクトを作り上げますが、ものづくりの前段階にあたるプロセスに重きが置かれているんです。

シューズも商品開発がゴールではありません。どれだけ機能性が優れていようが、直感的でカッコいいデザインにならうが、問われるのはお



客様とのコミュニケーションです。シューズによってお客様がどんな経験ができるのか。「経験をデザインのゴールに据える」という学びはずっと印象に残っていますし、いまの仕事にも活かすようにしています。



多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

本記事は連載企画です。さらに詳しい内容や他企業情報はWebでご覧になれます。



メーカー

カシオ計算機

「G-SHOCK」をはじめとした時計や楽器、電卓、電子辞書などさまざまな分野の商品を手がけ、国内外問わず巨大な市場を持つグローバルブランド。「創造 貢献」を経営理念に掲げ、人々の暮らしのなかに溶け込み、新しい価値を生み出し続ける企業を目指す。

世界的なデザインアワードで最高賞を受賞 人に伝える「思いの強さ」が原動力



開発本部 デザイン開発統轄部
デザイン戦略室 チーフデザイナー
菱山 浩昭さん

当社では、みなさんにお馴染みの「G-SHOCK」をはじめ、電子楽器の「Privia」や「Casiotone」など、多くのヒットブランドのデザインを多摩美の卒業生が手がけてきました。多摩美生に共通して感じるのは、自分なりのポリシーを持ち、芯がしっかりしているところです。多摩美らしさの特徴として、「思いの強い」学生が非常に多い印象を受けます。自分のデザインをきちんと第三者に伝えることができ、その思いが表現された作品のレベルも総じて高いです。

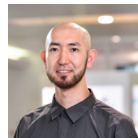
近年、リーダーシップを持ってデザインの可能性を広げ、事業を推進していけるデザイナー人材が求められようになっています。多摩美生はその像に合致し、当社でもリーダーやマネージャーとしてチームを引っ張っている人も少なくないため、社会での活躍の場は今後ますます広がっていくでしょう。



開発本部 デザイン開発統轄部
アドバンスデザイン室
神出 英さん
(97年プロダクトデザイン卒)

楽器のプロダクトデザインを中心に担当しています。プロダクトデザインチームの一員として携った電子ピアノ「Privia PX-S7000」は、Priviaシリーズの最上位モデルで、美しくモダンなデザインと新たな演奏体験の実現を目指し、従来のピアノとは異なる世界観を追求したものです。社内の複数部門の力を結集して完成した同製品は、国際的に権威のある世界三大デザインアワードのひとつ、ドイツの「iFデザインアワード2023」で最高賞のゴールドアワードを受賞しました。

多摩美の学生だった頃、自ら問題提起して、課題の発見から解決までリサーチしながらデザインにつなげるという授業がありました。会社では、指示された仕事をこなしているだけでなく、社会の問題などを自ら見出し、価値ある解決策を提案していくことが問われていると感じます。そういった姿勢は多摩美の授業で根付いたものです。加えて、多摩美らしいといわれる「思いの強さ」も、デザインの仕事の原動力になっています。私自身、在籍した会社で口々に「多摩美の学生は思いが強いよね」と言われてきましたから(笑)。



開発本部 デザイン開発統轄部
アドバンスデザイン室 リーダー
中村 周平さん
(11年プロダクトデザイン卒)

楽器担当のデザインディレクターとして、製品単体のスタイリングのもう一段上のレイヤーで、ディレクション業務を行っています。「Privia PX-S7000」でも、デザインコンセプトの策定と、デザインチームのメンバーそれぞれの個性やスキルを活かしつつ、コンセプトに合ったプロダクトデザインにまとめ上げることが私の役割でした。世の中の当たり前を崩して、新しい体験や価値の提供をデザインで創り上げていくのが面白く、やりがいを感じる場所です。

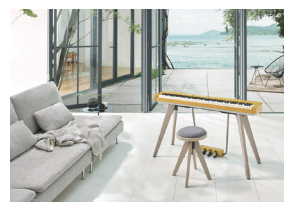
私は「コンセプトメイキングが得意」と社内で評価してもらっていますが、これはひとえに多摩美での学びの賜物だと思っています。際立って身になっているのは4年生時の卒業制作につながる事前課題です。異なる2つの分野のことを調査・研究して深く考察し、得られたことを組み合わせ、自分なりの新しい視点を生み出して卒業制作に挑むという内容でした。「Privia PX-S7000」にしても、ピアノのみを探究していたら、「ライフスタイルに調和するピアノ」という解には到達できなかったはず。大学時代は自分の興味や価値観にとことん向き合える貴重な時間です。多摩美はその環境が充実しています。未知なる可能性を突き詰めて、個性をとがらせください。



開発本部 デザイン開発統轄部
ブランドデザイン室 室長
村田 史奈さん
(07年情報デザイン卒)

ブランドデザイン室に所属し、ブランドの価値向上に取り組んでいます。ブランド構築のために、イメージの言語化と視覚化を行い、プロモーションの際にはアートディレクションを担うこともあります。「Privia PX-S7000」でいえば、ブランドステイメントとして「In Harmony with Life」を軸とするところからスタートしました。これが言語化です。デザイン部に限らず、関係部署を横断したプロジェクトチームを結成し、議論を重ねました。そうして言語化したイメージをもとに、目指す世界観をコンセプトアートとして視覚化します。どのような部屋で、どのようにピアノが置かれるのか。写真のトーンやインテリアまで明確にし、出来上がったコンセプトアートをプロジェクトメンバーで共有しました。

ブランドデザインにおいて情報を伝える手段は、文章、図、写真などさまざまあり、それらを整理して最適解を出さなければなりません。この一連



の過程は、振り返ると、多摩美の情報デザインの授業そのものだと気づきました。メーカーでは最近、若手でもアイデアが面白ければ採用されるなど、チャンスは広がっています。多摩美生の「思いの強さ」を武器に、自分のやりたいことを切り開いていってほしいと思います。



制作会社

日本テレビアート

日本テレビグループの総合デザインプロダクション。日本テレビの番組、イベント、映画などにおける美術、照明、テロップ、グラフィックデザイン、WEBなど、デザインに関わるほぼすべてを手掛けている。

確かな技術と 高いコミュニケーション能力で デザインチームの中核を担う多摩美生



コンテンツデザインセンター センター長
デザイン開発部 部長

大竹潤一郎さん

日本テレビアートには美術だけではなく、照明、テロップ、グラフィックデザイン、CG制作、校正校閲といった文字校正や音効の部門があり、全部ではないですが日本テレビが主催するイベントのデザインを請け負っています。僕が担当している美術デザイン部は番組のセットのデザインを手掛ける部署で、スタッフの約9割が美大出身者ですが、多摩美卒業生は全体の4割近くにのぼり、まさに今、現場の中心で活躍しているスタッフが多いですね。

多摩美出身者の特徴としては、明るくてノリがよく、コミュニケーション能力に長けている方が多い印象です。演出チームとの打ち合わせの際に明確なビジュアルのイメージや具体的な要望を提示されることは稀で、「明るく楽しい感じで」というようなざっくりしたオーダーを受ける場合がほとんどなので、相手の心を引きつける提案資料を作るための推進力も求められますし、トレンドに対する嗅覚の鋭さも重要になってきます。エンターテインメント系の映像美術ですし、打ち合わせで盛り上がったところからアイデアが出てくることもよくあるので、物事を多角的に捉える目を持ち、会話のキャッチボールを円滑にできる力はとても重要だと感じています。



コンテンツデザインセンター
美術デザイン部

浅田一花さん

(13年工芸卒)

年に一度の大型番組『Best Artist』や『MUSIC DAY』、レギュラー番組の『MUSIC BLOOD』といった、音楽番組などのセットデザインを担当しています。ディレクターが求める空間と、いらっしゃるゲストにどうマッチするかということを尊重してデザインしていますが、私の仕事は自分だけで完結するものではなく、照明さんがかっこよくライティングしてくださったり、カメラさんが現場で魅力的に撮ってくださったりして初めてセットが生きていくので、そういう一体感を目の当たりにするとやりがいを感じますね。

デザイナーというのは、行き先はわかっているけどその視界がクリアではないときに、横からそっと双眼鏡を差し出すような仕事だと感じるようになりました。より良い双眼鏡を手に入れるためには、音声さんはセットのどこにスピーカーを置くだろう、と想像力を細やかに働かせることも必要ですし、こんな番組があったら面白いな、という妄想力を持つ

ことが大切だと思います。

私が学んでいた工芸学科では、自分の作品づくりにおけるプランニングや、どういうコンセプトで作業を進めるかを発表する場を教授たちがつくっていただきました。当時、試行錯誤した経験が現在の仕事にも役立っていますし、尹熙倉先生がおっしゃっていた「自分の言葉をどんな包装紙に包み、どんなリボンで結んで相手に差し出すかが大事」という言葉を今でも折に触れて思い出します。学生のみなさんには、好きなこと



や興味があることを見つけるだけではなく、なぜそれに自分の心が揺れたのかを考えてみてほしいと思います。視野を広げ、物事に対する客観的な目を養うためにも、「なぜ」を追求し続けてほしいですね。



コンテンツデザインセンター
美術デザイン部

山根菜子さん

(21年劇場美術デザイン卒)

今は先輩について研修を受けている最中なのですが、「北海道とイチゴ」をテーマにしたホテルビュッフェのディスプレイや装飾デザインを担当しています。先方から「若い方にデザインしてほしい」とご希望があり、コンペティションに雪と氷をイメージしたデザインを提出したところ、選んでいただきました。

私はもともと音楽を長年やっていて、オペラのオーケストラピットでバイオリンを弾いていたんです。その後自分の適性などを考えて音大を断念しましたが、同じく大好きだった美術と音楽が関わる分野に携わりたいと思い、劇場美術デザインコースに進みました。

劇団扉座の本公演の美術を金井勇一郎先生（演劇舞踊デザイン学科教授）が手掛けられていたご縁で、2年生のときに研究生公演の美術を多摩美生が担当する機会があり、デザインを描いて図面を見せてというプレゼンテーションを経て初めてセットを描かせていただいた経験が糧になっていますね。3、4年生のときには同じくコンペを経て、学科の卒業公演の美術プランナーを担当しました。技術的なことはもちろん、効果的なプレゼン方法を模索し、演出家の要望に沿ってアプローチの形を変えられる柔軟性を身につけられたことは今でも大きな強みになっています。

デザインのみならず、照明や衣装など他のセクションにもひと通り触れる機会に恵まれました。テレビも舞台もすべての要素が重なってやっと成り立つ業界だということを課題を通して知ることができましたし、何より現役で活躍されている先生方から直接指導していただいたことで、より実践的な技術を身につけられたように思います。



彫刻・中谷ミチコ准教授が第43回中原悌二郎賞を受賞

彫刻・中谷ミチコ准教授の「デコボコの舟」が、「第43回中原悌二郎賞」を受賞しました。本賞は日本近代彫刻史に大きな足跡を残した旭川市ゆかりの彫刻家、中原悌二郎を世間に広く知らせるとともに、日本の彫刻界の発展に貢献する目的で1970年から旭川市が行っているもので、彫刻専門の賞として日本で最も歴史がある賞です。現在は2年に1度開催するビエンナーレ形式で開催されており、日本人作家の優れた国内発表作から受賞作が選ばれます。今回は2021年4月1日から2023年3月31日までの2年間を対象期間とし、448作家による505件の発表作品から選考委員による審議を経て選考。中谷准教授はこれまでの中原悌二郎賞本賞の受賞者のなかで最年少での受賞です。贈呈式は10月14日、旭川市大雪クリスタルホールにおいて開催されました。

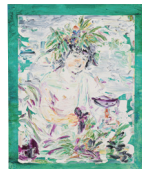


中谷ミチコ「デコボコの舟」撮影：若林勇人



第58回神奈川県美術展で 卒業生の平田守さんが大賞受賞

公募美術展「第58回神奈川県美術展」の入賞作品が発表され、平面立体部門で19年大学院油画修了・平田守さんが大賞を受賞しました。また同部門で14年大学院博士修了・澤田将哉さんが特選、大学院日本画1年・さまたろうさんがはまぎん財団賞を受賞、写真部門では大学院グラフィックデザイン1年・殷篤さん、工芸部門では工芸4年・洪詩楽さんがそれぞれ美術奨学会記念賞を受賞しました。本展は新進作家の育成と美術愛好家の創作活動の発表の場として、1965年から続く公募美術展です。58回目の今回は全国から1,289点の応募があり、審査を経て4部門の大賞を含む42の入賞作品が決定しました。展覧会は9月6日から10月1日まで神奈川県民ホールで開催され、11月3日から11月11日には鎌倉芸術館ギャラリーでの巡回展が予定されています。



平田守「My IKEA painting work (花瓶とまつ毛と棚)」/「My Bacchus (Green)」

TERRADA ART AWARD 2023で 卒業生のやんツーさんがファイナリスト選出

09年大学院情報デザイン修了・やんツーさんが「TERRADA ART AWARD 2023」のファイナリストに選出されました。これは寺田倉庫株式会社主催する新進アーティストの発掘を目的としたアワードです。世界を舞台に活躍するアーティストの輩出を念頭に、国際的な視点と現代アートに関する深い見識を持つ審査員により、国内外1,025組の応募の中から5組が選ばれました。ファイナリストは最終審査において提出した展示プランに基づき、賞金の300万円を制作費として活用し、実際に作品を制作します。ファイナリストの作品は、2024年1月10日～28日、寺田倉庫イベントスペースにて「TERRADA ART AWARD 2023 ファイナリスト展」として発表される予定です。初日に各審査員賞が授与されます。※2024年1月10日(水)は招待者のみ入場可能



卒業生の伊東ケイスケさんが ベネチア国際映画祭に4年連続ノミネート



伊東ケイスケ「Sen」イメージショット

10年グラフィックデザイン卒業・伊東ケイスケさん監督のVRアニメーション「Sen」が「第80回ベネチア国際映画祭」のXR部門「Venice Immersive」にノミネートされました。同部門の4年連続ノミネートは世界初の快挙。「Sen」はお茶碗型の触覚デバイスを用い、VR空間で複数人同時に日本伝統の茶道の世界に身を置き、生命と宇宙の繋がりを体験できる作品です。

PFFアワード2023で 学生および修了生の作品が入選

「第45回ぴあフィルムフェスティバル『PFFアワード2023』」で芸術学4年・鈴木紀貴さんがサウンドデザインを担当した「逃避」および、23年大学院グラフィックデザイン修了・キョウ・ガンの「Sewing Love」が入選し、9月9日から23日に国立映画アーカイブ、10月14日から22日に京都文化博物館で上映されたほか、10月31日までオンライン配信されています。



「逃避」(サウンドデザイン：鈴木紀貴)

世界を変える30歳未満に 卒業生3名が選出

「Forbes JAPAN 30 UNDER 30 (世界を変える30歳未満) 2023」が8月24日に発表され、卒業生ら3名を含む120名が選出されました。4つの部門のうちART & STYLE & SOCIAL部門に、16年メディア芸術卒業・石毛健太さん、21年同卒業・米澤柊さん、そして22年大学院情報デザイン修了・花形積さんが選出されました。



若手作家の登竜門「SICF24」 2部門で卒業生3名が受賞

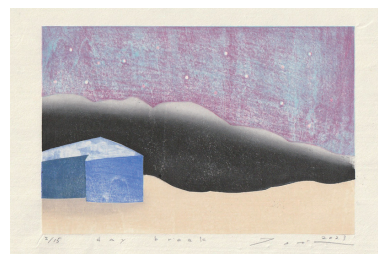
若手作家の発掘・育成・支援を目的とした公募展形式のアートフェス「第24回スパイラル・インデペンデント・クリエイターズ・フェスティバル(SICF)」MARKET部門で21年プロダクトデザイン卒業・もりたるなさんが準グランプリ、17年大学院プロダクトデザイン修了・高橋星一さんが鈴木啓太賞、EXHIBITION部門で21年プロダクトデザイン卒業・万年さんが萬代基介賞を受賞しました。



もりたるな「くるくる」撮影:ただ(ゆかい)
写真提供:スパイラル/株式会社ワコールアートセンター

アワガミ国際ミニプリント展で 版画卒業生が準大賞

和紙を使った版画作品の公募展「アワガミ国際ミニプリント展2023」で、12年大学院版画修了・石橋佑一郎さんの作品が準大賞に選ばれました。その他にも優秀賞に02年大学院油画修了・内木場映子さん、14年大学院博士後期修了・Lee Wonsukさん、98年版画卒業・本田将也さん、審査員 平木美鶴賞に02年大学院版画修了・谷黒佐和子さんの作品が入賞しています。



石橋佑一郎「day break」

いのち支える動画コンテストで メディア芸術2年生が優秀賞

「いのち支える動画コンテスト2023」でメディア芸術2年・木下望有さんの「伝わるよ。」が優秀賞を受賞しました。全国から計138作品の動画アイデア(絵コンテ)の応募があり、厳正な審査で「優秀賞」に選出された4作品が学生自身の手で動画化されました。学生の自殺が深刻な社会課題となっているなか、学生の視点で“自殺対策”に関するショートムービーを制作し、“自殺対策”を“自分ごと”として捉えてもらうことを目的として開催されています。



木下望有「伝わるよ。」

トートバッグデザインの 学生コンテストで最優秀賞

総合印刷会社の株式会社帆風が「2023年度バンフーデザインコンテスト」の受賞作品を発表しました。その中の一つ第5回バンフー学生トートバッグデザインコンテストで、グラフィックデザイン2年・富井遥さんが総応募作品数2,437点の中から最優秀賞に選ばれました。テーマは「このトートバッグを持つと、夢に向かって歩みたくなる。そんなあなたらしい夢を表現してください!」でした。



富井遥さんの受賞作品

イオンモバイルの コンテストで優秀作品賞

「イオンモバイルブランドメッセージコンテスト2023」企画部門で優秀作品賞を情報デザイン2年・片山祐美子さんが受賞しました。通信設備を持たないMVNO(仮想移動体通信事業者)の弱点をイオンのブランドでクリアする企画が評価されました。“えらべるって、うれしい。”の実現に向けたイオンモバイルのブランド確立のため、2022年度からコンテストを開催、学生からアイデアを集め発信しています。

トップパリュのイメージ

- ・大手企業の商品という安心感
- ・近所で買って身近
- ・安くて手頃に入手できる

片山祐美子さんの受賞企画「ケータイもトップパリュ」

テキスタイルデザイン卒業生 「Artists in FAS 2023」に選出



滞る制作中の小島莉莉さん

藤沢市アートスペース (FAS) が実施するアーティスト・イン・レジデンス・プログラム「Artists in FAS 2023」の1人に、23年テキスタイルデザイン卒業・小島莉莉さんが選出されました。7月から3ヵ月間の滞在制作のち、10月21日から来年1月14日まで「入選アーティストによる成果発表展」が開催されます。このプログラムは2016年にスタートし、今年で8回目を迎えます。

文化庁クリエイター育成支援事業に 学生・卒業生が採択



「令和5年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業」の採択企画が8月31日に発表され、学生・卒業生ら4名が採択されました。採択されたのは国内クリエイター創作支援プログラムに12年グラフィックデザイン卒業・ニハイサリナさん、22年大学院情報デザイン修了・花形積さん、国内クリエイター発表支援プログラムに15年大学院博士修了・中尾拓哉さん他1名、メディア芸術コース3年・野口駆/あゑさんです。

上月財団クリエイター育成事業に 学生と卒業生が選出

コナミグループ創業者の運営財団、上月財団が文化助成の一環で実施している「第20回クリエイター育成事業」で、グラフィックデザイン1年・染野涼架さん、メディア芸術1年・古賀俊皓さん、大学院グラフィックデザイン2年・林礼菜さん、19年メディア芸術卒業・上原明日香さん、23年グラフィックデザイン卒業・関口郁海さんが助成対象に選出されました。対象者には年額60万円が支給されます。



関口郁海「figure wear」

シャネルのコレクションショーで演劇舞踊デザインの学生がパフォーマンス

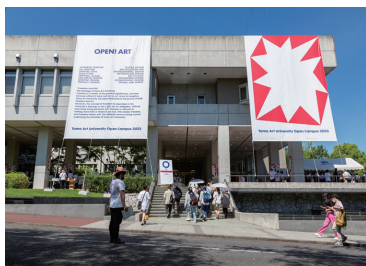
6月1日、演劇舞踊デザイン学科2~4年生の22名が、東京ビッグサイトで開催されたシャネルの2022/23年メティエダールコレクションでダンスパフォーマンスを披露しました。このコレクションショーは卓越した職人技を讃え、フランス語で「芸術的な手仕事」の名を冠して毎年12月に行われているもので、セネガルのダカールで発表されたショーの再演企画です。パフォーマーとして参加した学生たちは振付師のディミトリ・シャンブラスさん監修のもと、他大学の学生とともにショーのオープニングシーンと会場までの道中を「スローショー」で彩りました。シャンブラスさんのワークショップから始まった今回のプロジェクトで学生たちはシャネルが誇るメティエダールの世界観を全身で表現。訪れた多くの観客を魅了しました。



メティエダールコレクションでのダンスパフォーマンスの様子

夏と秋の3回にわたり オープンキャンパスを開催

7月15日・16日、八王子キャンパスで夏のオープンキャンパスを開催しました。昨年同様完全予約制とし、作品展示や授業公開、教員や職員との相談に特化し「大学での学び」を体感してもらうことを重視。2日間で合計12,244名の参加者があり大変にございました。7月29日にはオンライン版、9月24日には進学相談会メインのオープンキャンパスも実施しました。



夏のオープンキャンパスの様子

「多摩美術大学助手展2023」 が行われました

本学助手として所属する作家らによる展覧会「多摩美術大学助手展2023」が、9月2日から9月15日、八王子キャンパス アートテークギャラリーで、作品解説・クロストークのイベントとともに開催されました。本学の助手は、様々な経緯で美術を学び、研究室の補助業務を担う一方、それぞれの専門領域で作家・アーティスト・研究者として活躍しています。



「多摩美術大学助手展2023」展示風景 撮影：桑原仁太

昭和大学×テキスタイルデザイン専攻 による企画展

昭和大学と本学は包括提携協定を締結して以来、積極的な連携活動を行っています。その一環として、テキスタイルデザイン専攻では2019年6月から昭和大学江東豊洲病院で作品展示を行っています。相互理解を深める意見交換会を通し、芸術と美術の双方の観点からテキスタイル作品が医療現場や療養環境にもたらす効果やその意義を考える展示「芸術と美術Ⅲ」をTUBで9月に行いました。選出された作品は、昭和大学江東豊洲病院に展示されます。



「芸術と美術Ⅲ」展示風景

木嶋正吾教授の退職記念展 「零度から」開催

油画の木嶋正吾教授の退職記念展「零度から」が、2023年6月6日から19日まで、八王子キャンパス アートテークギャラリーで開催されました。長年にわたる創作活動の中で印象に残った金属レリーフ作品から現在のミクストメディア作品まで、シリーズとして発表を続けてこられた「零度」「零視」「零形」「零色」「零層」が展示されました。17日にはギャラリートークも行われました。



ギャラリートークの様子

二子玉川ライズとの地域連携アートプロジェクト「タマリバース」開催

本学と二子玉川ライズとの地域連携アートプロジェクト「タマリバース」を10月7日、8日の2日間、二子玉川ライズ ガレリアで開催しました。本プロジェクトは上野毛キャンパスで学ぶ学生たちが2011年の二子玉川ライズ開業イベントにパフォーマーとして参加したことをきっかけに、以降毎年開催しているものです。2016年度からは全学科対象のPBL科目として産学連携のカリキュラムを展開。企画の立ち上げからコンセプトの設計、脚本、演出、衣裳、小道具、メディア展開まで、学生が主体となって行っています。12回目の今回は“ココ・二子玉川”を舞台に繰り広げる、時空を超えた不思議な物語の広場演劇「あ、へんしん！」の上演のほか、登場人物が街の人々と交流する「チェックチェック☆ムーンウォーク講座」や近隣の保育園児とのコラボレーション企画も実施しました。



タマリバースvol.12「あ、へんしん！」上演の様子



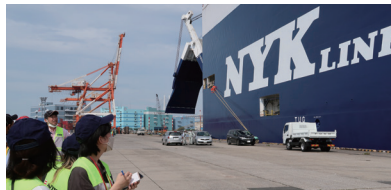
「環境デザイン学科」は「建築・環境デザイン学科」に



2024年4月から「環境デザイン学科」は「建築・環境デザイン学科」に名称変更します。旧建築科と旧インテリアデザインを統合し、1998年4月「環境デザイン学科」を開設。この統合で対象領域は、「建築を取り巻く内部・外部空間デザインから街並・都市までの環境」に広がりました。その後「環境」＝「地球環境・自然環境」という理解が一般化し、対象領域である「環境」という理解が伝わりにくくなったため名称変更となりました。

日本郵船との共同研究で自動車専用船を訪船しフィールドワークを実施

6月30日、プロダクトデザイン専攻Studio3の学生13名が、日本郵船との「次世代の循環型社会に適応するプロダクトデザイン」の産学共同研究フィールドワークとして横浜・大黒ふ頭に停泊中の自動車専用船を訪ねました。このフィールドワークは本学が複数の企業と連携しながら取り組む「すてるデザイン」プロジェクトの一環として行われ、船員の生活や業務の観察から、循環型社会に適応する船員のウェアを提案しようと取り組んでいます。



自動車専用船船尾のランプウェイが降下する様子を見学

留学生との親睦を深めるパーティーを3年ぶりに開催



国際交流パーティーの様子

5月26日、留学生との親睦を深める国際交流パーティーを八王子キャンパスのグリーンホールで行いました。これは国際交流センターの主催によるもので、コロナ禍を経て3年ぶりの開催となりました。留学生と日本人学生合わせて約120人が参加し、軽食を取りながら有志の学生が企画したゲームなどを楽しみました。内藤廣学長も会場に足を運び、学生らの活発な交流を促しました。

ウクライナからの学生と内藤学長らによるランチ会実施

本学は戦禍のウクライナで厳しい状況下にある芸術を志す学生を支援すべく、研究・制作環境を提供するプログラムを行っており、現在までに3名の学生を受け入れています。内藤廣学長の企画で、学生と内藤学長、久保田晃弘国際交流センター長、和田達也教務部長ら学内関係者によるランチ会を5月31日に八王子キャンパスグリーンホールにて行いました。生活の報告や制作活動に関する提案など参加者全員による有意義で活発な意見交換がなされました。



学長らとのランチを楽しむウクライナ学生たち

AAC所蔵資料を活用した北園克衛展を開催



展示資料

アートアーカイブセンター（AAC）は2回目の所蔵資料展として「北園克衛 I 詩人のデザイン」を八王子キャンパスアートテークで6月22日から7月21日に開催しました。北園は、日本を代表するモダニズム詩人として、前衛的な詩作をはじめ、編集、装幀、デザインなどの分野で活躍。本学は1993年に北園克衛文庫を設立、八王子キャンパスでは初の資料展示。

循環型経済のプロジェクト「すてるデザイン」が書籍に

多摩美が取り組んだサーキュラーエコノミーのプロジェクト「すてるデザイン」が、2023年7月に書籍として出版されました。「すてるデザイン」とは、「つくる」ことで産業を支えてきたこれまでのデザインから、「すてる」を考えることで社会や産業を支えていくデザインヘシフトすることを示した言葉です。新しい生活、環境、経済に役立つサステナブルデザイン事例集となっています。



書籍「すてるデザイン」の表紙

学外交流&展示イベント 「屋台トーク」開催



トークセッションの様子

プロダクトデザイン専攻studio2で学ぶ3年生による学外交流と展示イベント「屋台トーク〜デザインの、マルチステークホルダーダイアログ〜」を、5月27日から30日まで八王子キャンパスアートテークギャラリーで開催しました。任天堂株式会社など3日間で19社 253名が参加し、最終日の5月30日には三井住友銀行に務める先輩と学生によるトークセッションが行われました。

ダイソンのエンジニアと 学生とのトークセッション

5月26日、プロダクトデザイン専攻Studio3の学生と、ダイソンのエンジニアとのトークセッション、ならびに作品プレゼンテーションを原宿Jingで行いました。セッションの第1部では、ダイソンのシニア・エンジニアリング・マネージャーによる「先駆的イノベーションの突破口」と題した講演が行われ、第2部では、学生が持続可能性の視点から制作した提案作品を会場に持ち込んでプレゼンテーションを行いました。



学生によるプレゼンテーションの様子

アキバタマビ21の イベントシリーズ配信中

現在稼働準備中のアキバタマビ21では、これまでの参加アーティストによるトークやワークショップなどを通して、これまでの振り返りこれからの活動につながるヒントを探る「これまでとこれから」、本をテーマにした「アーティストと本」という2つのイベントシリーズを開催しています。トークの様子はアキバタマビ21の



アキバタマビ21 YouTubeチャンネル

Youtubeチャンネルにてアーカイブ配信していますのでご覧ください。



これまでとこれから5「制作における他者への眼差し」トークの様子

多摩美術大学校友会 ニューヨーククラブ展開催

多摩美術大学校友会ニューヨーククラブ「ホーム・アウェイ・フロム・ホーム」がニューヨークのTenri Galleryで9月19日から10月2日まで行われました。同テーマで第19回目を迎える「ホーム・アウェイ・フロム・ホーム」とは故郷を離れ異国の地で暮らす作家たちが、後に残してきた「日本」を意識することにより個々の内奥を見据え、ニューヨークという世界のアートマーケットの中心での研鑽がもたらす、自らの殻を破るような、創造の成果を発表する展覧会です。



レセプションに集まった出品者、応援者の方々

演劇舞踊デザイン学科 2023年度卒業公演「音楽」

演劇舞踊デザイン学科2023年度の卒業制作演劇公演「音楽」を2024年1月13日、14日の2日間にわたって、池袋の東京芸術劇場シアターイーストで行います。原作：『音楽 完全版』大橋裕之（カンゼン刊）、作・演出：西崎達磨（演劇舞踊コース7期生）、出演：演劇舞踊コース7期生/2023年度研究生、スタッフ：劇場美術デザインコース7期生です。ぜひお越しください。

研究活動

2023年度 科学研究費助成事業

●基盤研究 (B) (一般)

- 深津裕子教授 (リベラルアーツセンター)
 - 日本の文様デザインアーカイブの創造—東西文化交流と近代デザインの視座から
- 港千尋教授 (情報デザイン学科)
 - 現代美術の触覚的体験を用いた平和学習のメソッド構築
- 桐房子教授 (情報デザイン学科)
 - 博物館での親子の協働体験を支援するARを用いたコンテンツデザインの研究
- 植村朋弘教授 (情報デザイン学科)
 - 保育者コミュニティの形成を促すペダゴジカル・ドキュメンテーション開発と実証研究

●基盤研究 (C) (一般)

- 大島徹也教授 (芸術学科)
 - もう一つの抽象表現主義史—抽象表現主義者たちの自主的集団活動についての考察
- 佐賀一郎准教授 (グラフィックデザイン学科)
 - 美術・デザイン史概念を共有・育成するデザインアーカイブ群の構築
- 中村寛教授 (リベラルアーツセンター)
 - アメリカ社会の暴力と反暴力・脱暴力の試みに関する人類学的研究
- 青木香代子准教授 (環境デザイン学科)
 - 近世ヴェネツィア共和国による帰属都市への建築的介入
- 久保田晃弘教授 (情報デザイン学科)
 - インタラクションの圏的モデルとそのアーカイブ化
- 笠原恵子教授 (彫刻学科)
 - 擬態のアメリカ美学—アースワーク作品にみるアメリカの生成と先住民文化の流用—
- 木下京子教授 (リベラルアーツセンター)
 - 在米の仏像と仏具およびアーカイブ調査—寺宝流出と古美術商、収集家の関係とその実態

- 菅俊一准教授 (総合デザイン学科)
 - ポストアニメーション手法による時間補完能力を用いたメディア表現手法の開発
- 高梨美穂教授 (リベラルアーツセンター)
 - 移動表現の母語習得と認知発達メカニズムの解明
- 湯澤幸子教授 (環境デザイン学科)
 - 70年代の大野美代子のインテリア・構築にみる領域横断的デザインの可能性
- 小泉俊己教授 (油画専攻)
 - 「もの派」以降の日本現代美術アーカイブの構築と活用：安齊重男資料を対象として

- ムーニースザンヌ准教授 (国際交流センター)
 - Immersion through Digital Technologies for Optimal Engagement with Contemporary Art Installation
- 菊地武彦教授 (油画専攻)
 - 機能性PVAL製品による膠への応用研究
- 佐竹邦子教授 (版画専攻)
 - アルミ版リトグラフ研磨技術継承への挑戦
- 後藤正矢准教授 (リベラルアーツセンター)
 - 大学における幼稚園教員養成黎明期のカリキュラムに関する歴史的研究

●挑戦的研究 (萌芽)

- 金沢百枝教授 (芸術学科)
 - エトルリアを基軸とした文化的連続性とその研究領域の確立

●若手研究

- 陳凡宇講師 (日本画専攻)
 - 近代日本画における画紙の特質による技法の展開
- 中嶋英樹准教授 (リベラルアーツセンター)
 - 1880年代から1920年代の英国小説における「散漫な注意」の技法
- 原美湖講師 (リベラルアーツセンター)
 - ファンリレーションスキルを備えた美術科教員養成の理論的・実践的研究
- 井沼香保里助教 (大学院)
 - 心霊主義的文学における「代替科学」の展開

●国際共同研究加担基金 (国際共同研究強化 (B))

- 深津裕子教授 (リベラルアーツセンター)
 - 台湾の文様デザインアーカイブの創造—アジアの少数民族文化の固有性の記録—

●国際共同研究加担基金 (海外連携研究)

- 木下京子教授 (リベラルアーツセンター)
 - 文化メディアとしての書籍研究—トレス・コレクションの目録化と解題作成、理解の促進

●研究成果公開促進費 (研究成果公開発表 (B) (ひらめき☆ときめきサイエンス〜ようこそ大学の研究室へ〜KAKENHI))

- 高梨美穂教授 (リベラルアーツセンター)
 - 成長することば—なぜなら? 回文? ことば遊びを使って絵本で表現してみよう!

2023年度 科学研究費以外の公的助成事業

●「文化庁」文化芸術振興費補助金 (メディア芸術アーカイブ推進支援事業)

- 森脇裕之教授 (情報デザイン学科)
 - 名古屋国際ビエンナーレARTEC 全記録アーカイブ事業

教員人事

新規採用

●美術学部

- 高見真平 講師 (情報デザイン学科情報デザインコース)
(2023年10月1日付)

2024年度新入生からの 学費改訂について

本学は、常に充実した教育と修学環境を提供することを使命としてまいりましたが、その持続のために、昨今の経済状況や教育の変化を鑑み、2024年度の美術学部・大学院の新入生から学費を改訂いたします。なお、2023年度以前の入学者については学費の変更はありません。本学の教育研究活動について、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

学校法人多摩美術大学 令和4年度会計報告

自 令和 4年4月1日
至 令和 5年3月31日

1 資金収支計算

【資金収支計算総括表】

資金収支計算について、その主な内容を報告します。

▼収入の部 (単位:千円)			
科目	予算	決算	差異
学生生徒等納付金収入	7,788,605	7,788,666	△61 ①
手数料収入	248,862	248,862	0
寄付金収入	12,000	12,736	△736 ②
補助金収入	645,302	684,508	△39,206 ③
(うち、国庫補助金収入)	(644,902)	(684,119)	(△39,217)
(〃 地方公共団体補助金収入)	(400)	(389)	(11)
資産売却収入	600,126	600,126	0 ④
付随事業・収益事業収入	250,848	241,047	9,801 ⑤
受取利息・配当金収入	65,000	78,356	△13,356 ⑥
雑収入	319,143	331,338	△12,195
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	3,583,843	4,364,584	△780,741
その他の収入	1,097,334	2,299,940	△1,202,606
資金収入調整勘定	△4,126,150	△4,139,725	13,575
当年度資金収入合計(A)	10,484,913	12,510,438	△2,025,525
前年度繰越支払資金	14,389,753	14,389,753	—
収入の部合計	24,874,666	26,900,191	△2,025,525

- ① 収容定員数を確保しているため、安定的な財政基盤を維持できております。
- ② 多摩美サポーター募金による恒常的な募集により、前年度よりも寄付件数が増加しました。予算に対しては上回りました。
- ③ 私立大学経常費補助金4億8,159万円、うち特別補助2,795万円(成長力強化に貢献する質の高い教育12万円、大学等の国際交流の基盤整備479万円、大学院等の機能の高度化2,304万円)の交付がありました。前年度に対して一般補助は5,427万

- 円減額し、特別補助は880万円増額しました。
- ④ 国債3億円、銀行債2億円、財投機関債1億円の有価証券満期償還額です。
- ⑤ 多摩美オーリープ館の寮費等収入により補助活動収入が前年度より増加しました。
- ⑥ 長期金利は低水準が継続していますが、銀行の定期預金から債券の新規購入による資産運用額を増額し、運用利回りを高めたことにより予算額及び前年度決算額を上回りました。

▼支出の部 (単位:千円)			
科目	予算	決算	差異
人件費支出	4,309,278	4,303,404	5,874 ⑦
教育研究経費支出	2,590,087	2,456,420	133,667 ⑧
管理経費支出	716,776	672,345	44,431
借入金等利息支出	0	0	0
借入金等返済支出	0	0	0
施設関係支出	4,620,303	4,578,325	41,978 ⑨
設備関係支出	489,433	467,034	22,399
資産運用支出	3,432,107	3,430,656	1,451 ⑩
その他の支出	348,330	348,328	2
予備費	153,324	—	153,324
資金支出調整勘定	△478,083	△608,725	130,642
当年度資金支出合計(B)	16,181,555	15,647,787	533,768
翌年度繰越支払資金	8,693,111	11,252,404	△2,559,293 ⑪
支出の部合計	24,874,666	26,900,191	△2,025,525
当年度資金収支差額(A)-(B)	△5,696,642	△3,137,349	△2,559,293

- ⑦ 退職金支出の増加(定年退職者の増加)により人件費が前年度より増額しましたが、予算額は下回りました。
- ⑧ 前年度決算額に対してウクライナ情勢の影響によるエネルギー資源の高騰で光熱水費が9,129万円、原材料価格の上昇等により消耗品費が3,925万円、修繕費が7,468万円の増加となりました。その他にも旅費交通費、奨学金、雑費等も増加しました。一方で、通信運搬費、衛生費等は減少し、予算額を下回りました。
- ⑨ 八王子キャンパス…BLUE CUBE土地・建物取得、画材店ユニットハウス新築工事。ネットワーク改

- 善工事、メディアホール吊物設備改修工事、絵画北棟FCU更新工事。
- 上野毛キャンパス…Cube新築工事、Mensa新築工事、1号館耐震補強工事等を実施しました。
- ⑩ 減価償却引当特定資産を10億円増額(合計123億円)しました。多摩美サポーター募金により第3号基金引当特定資産を増額しました。有価証券を新規に7億1,010万円購入しました。
- ⑪ 上記により翌年度繰越支払資金が予算対比では増加、前年度決算額対比では31億3,735万円減額しました。

2 事業活動収支計算

【事業活動収支計算総括表】

事業活動収支計算について、その主な内容を報告します。

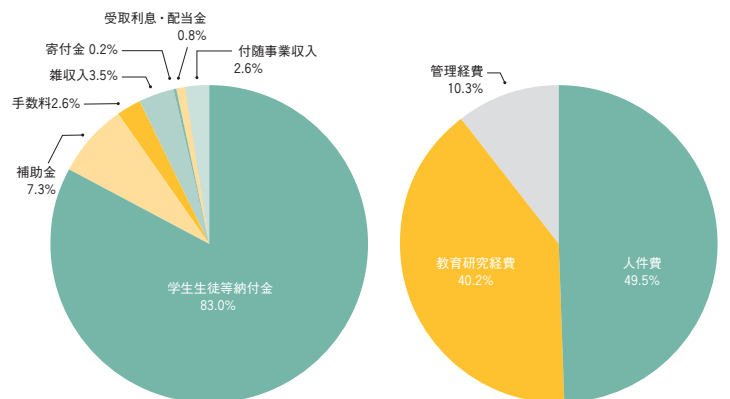
(単位:千円)			
科目	予算	決算	差異
学生生徒等納付金	7,788,605	7,788,666	△61
手数料	248,862	248,862	0
寄付金	12,000	11,575	425
経常費等補助金	645,302	645,292	10
付随事業収入	250,848	241,047	9,801
雑収入	318,568	330,751	△12,183 ①
教育活動収入計	9,264,185	9,266,193	△2,008
人件費	4,287,705	4,262,045	25,660 ②
教育研究経費	3,610,087	3,460,132	149,955 ③
(うち減価償却額)	1,020,000	1,003,712	16,288
管理経費	927,701	883,269	44,432
(うち減価償却額)	218,036	218,035	1
徴収不能額	0	0	0
教育活動支出計	8,825,493	8,605,446	220,047
教育活動収支差額	438,692	660,747	△222,055
科目	予算	決算	差異
受取利息・配当金	65,000	78,355	△13,355
その他の教育活動外収入	0	0	0
教育活動外収入計	65,000	78,355	△13,355
借入金等利息	0	0	0
その他の教育活動外支出	0	0	0
教育活動外支出計	0	0	0
教育活動外収支差額	65,000	78,355	△13,355
経常収支差額	503,692	739,102	△235,410

- ① 退職金財団からの交付金、科学研究費補助金間接経費等により予算を上回りました。
- ② 職員人件費、退職給与引当金繰入額は前年度実績より増加しましたが、予算額より下回りました。
- ③ 前年度実績比では、支払報酬手数料、修繕費、業務委託費、光熱水費等が増加しましたが、衛生費、厚生費等の減少により、全体額は予算を下回りました。
- ④ 私立大学施設整備費補助金3,922万円、科学研究費補助金から購入された教育研究用機器備品の寄贈等により前年度実績額及び予算額を上回りました。
- ⑤ 図書汚損・紛失・除籍による処分差額です。

- ⑥ 上記の結果、事業活動収入は93億9,357万円となり予算を上回りました。また、基本金組入前当年度収支差額は前年度より4%下がり8.2%になりました。これは今後の継続的な施設整備計画の資金に充当されます。当年度の収支差額は△35億3,242万円となり、翌年度繰越収支差額は△67億221万円となりました。この繰越収支差額は、将来計画にかかる基本金の先行組入れや借入金に頼らない施設設備充実の結果生じた基本金組入れによるもので、長期的な改善を計り、今後も事業活動収支の均衡がとれた運営を目指します。

注：基本金組入前当年度収支差額比率=基本金組入前当年度収支差額÷事業活動収入×100

科目	予算	決算	差異
資産売却差額	4,633	4,759	△126
その他の特別収入	1,875	44,267	△42,392 ④
特別収入計	6,508	49,026	△42,518
資産処分差額	9,568	7,567	2,001 ⑤
その他の特別支出	7,111	7,111	0
特別支出計	16,679	14,678	2,001
特別収支差額	△10,171	34,348	△44,519
[予備費]	329,515	—	329,515
基本金組入前当年度収支差額比率(注)	1.8%	8.2%	—
基本金組入前当年度収支差額	164,006	773,450	△609,444
基本金組入額合計	△4,906,600	△4,305,874	△600,726
当年度収支差額	△4,742,594	△3,532,424	△1,210,170
前年度繰越収支差額	△3,169,788	△3,169,789	1
翌年度繰越収支差額	△7,912,382	△6,702,213	△1,210,169
事業活動収入計	9,335,693	9,393,574	△57,881 ⑥
事業活動支出計	9,171,687	8,620,124	551,563



事業活動収入(93.9億円)の構成比率

事業活動支出(86.2億円)の構成比率

③ 貸借対照表 (兼財産目録)

貸借対照表について、前年度からの増減を報告します。

令和5年 3月31日

▼資産の部 (単位:千円)			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	(64,165,262)	(59,497,452)	(4,667,810)
有形固定資産	(40,568,934)	(36,737,289)	(3,831,645)
土地 (208,208.46㎡)	16,824,725	14,275,479	2,549,246
建物 (124,271.69㎡)	17,573,954	16,377,037	1,196,917
構築物 (381件)	1,876,245	1,963,284	△87,039
教育研究用機器備品 (12,969点)	1,082,824	954,459	128,365
管理用機器備品 (601点)	192,488	194,155	△1,667
図書 (236,035冊)	1,543,237	1,515,468	27,769
美術参考品 (8,712点)	1,386,965	1,384,964	2,001
美術参考資料 (385種)	72,593	71,178	1,415
車両 (8台)	459	1,265	△806
建設仮勘定 (7件)	15,444	0	15,444
特定資産	(20,991,804)	(20,265,217)	(726,587)
第2号基本基金引当特定資産	6,294,337	6,519,625	△225,288
第3号基本基金引当特定資産	378,233	376,851	1,382
減価償却引当特定資産	12,300,000	11,300,000	1,000,000
退職給与引当特定資産	1,966,822	2,008,179	△41,357
多摩美術大学創立80周年記念奨学金基金引当特定資産	52,412	60,562	△8,150
その他の固定資産	(2,604,524)	(2,494,946)	(109,578)
電話加入権 (38台)	2,273	2,273	0
ソフトウェア (17件)	35,485	47,782	△12,297
有価証券	2,557,087	2,434,205	122,882
うち、(1) 利付国債	346,987	634,205	△287,218
◇ (2) 財投機関債	0	100,000	△100,000
◇ (3) 銀行債	1,000,000	1,000,000	0
◇ (4) 事業債	1,110,000	700,000	410,000
◇ (5) ユーロ円債	100,100	0	100,100
差入保証金	9,679	10,686	△1,007
長期貸付金	0	0	0
流動資産	(11,715,709)	(14,729,122)	(△3,013,413)
現金預金	11,252,404	14,389,753	△3,137,349
未収入金	352,249	264,369	87,880
前払金	100,888	74,093	26,795
立替金	10,168	907	9,261
資産の部 合計	75,880,971	74,226,574	1,654,397

▼負債の部 (単位:千円)			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	(1,966,821)	(2,008,179)	(△41,358)
退職給与引当金	1,966,821	2,008,179	△41,358
流動負債	(5,268,891)	(4,346,586)	(922,305)
未払金	534,633	238,180	296,453
前受金	4,364,584	3,787,477	577,107
預り金	369,674	320,929	48,745
負債の部 合計	7,235,712	6,354,765	880,947

▼純資産の部 (単位:千円)			
科目	本年度末	前年度末	増減
基本金	(75,347,471)	(71,041,598)	(4,305,873)
第1号基本金	68,194,901	63,665,122	4,529,779
第2号基本金	6,294,337	6,519,625	△225,288
第3号基本金	378,233	376,851	1,382
第4号基本金	480,000	480,000	0
繰越収支差額	(△6,702,212)	(△3,169,789)	(△3,532,423)
翌年度繰越収支差額	△6,702,212	△3,169,789	△3,532,423
純資産の部 合計	68,645,259	67,871,809	773,450
負債及び純資産の部 合計	75,880,971	74,226,574	1,654,397

減価償却額の累計額		
科目	本年度末	前年度末
減価償却額の累計額	27,879,383	26,908,621
基本基金未組入額	291,174	30,844
		260,330

- ① BLUE CUBE土地・建物取得、画材店ユニットハウス新築工事、八王子ネットワーク改善工事、メディアホール吊物設備改修工事、絵画北棟FCU更新工事他。
- ② 八王子ネットワーク改善工事、PC他。
- ③ 丸山浩司絵画作品7点他。
- ④ 第2号基本基金引当特定資産残高は2億2,529万円減額し62億9,434万円となり、第3号基本基金引当特定資産は寄付による基本金増により138万円の増額。減価償却引当特定資産残高は10億円増額し123億円。退職給与引当特定資産残高は退職給与引当金が4,136万円減の19億6,682万円。多摩美術大学創立80周年記念奨学金基金引当特定資産残高は奨学金給付による取り崩し930万円と寄付金及び利付国債債券による運用益115万円との差額815万円
- ⑤ 現金預金残高は前年度比31億3,735万円減少し112億5,240万円、私立大学退職金財団交付金収入等の未収入金が8,788万円増加し3億5,225万円、前払金は2,679万円増加し1億89万円。
- ⑥ 退職給与引当金残高は312名分で4,136万円減額の19億6,682万円。
- ⑦ 第1号基本基金は令和4年度の組入額(資産取得)50億4,866万円と前年度未組入れ高の組入れ分3,084万円の合計から当年度除却資産分の基本金組入額2億5,855万円と未払金による未組入れ分2億9,117万円を除いた45億2,978万円を組入れました。

④ 財務比率 | 令和2年度から令和4年度 |

項目	算式	評価	令和2年度	令和3年度	令和4年度	芸術系平均値
人件費比率	$\frac{\text{人件費}}{\text{経常収入}}$	▼	43.6%	44.4%	45.6%	51.7%
人件費依存率	$\frac{\text{人件費}}{\text{学生生徒等納付金}}$	▼	50.5%	52.4%	54.7%	65.5%
管理経費比率	$\frac{\text{管理経費}}{\text{経常収入}}$	▼	4.4%	7.6%	9.5%	10.6%
借入金等利息比率	$\frac{\text{借入金等利息}}{\text{経常収入}}$	▼	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
事業活動支出比率	$\frac{\text{事業活動支出}}{\text{事業活動収入}}$	▼	91.2%	87.8%	91.8%	90.6%
基本金組入後収支比率	$\frac{\text{事業活動支出}}{\text{事業活動収入 - 基本金組入額}}$	▼	99.7%	107.7%	169.4%	103.7%
固定資産構成比率	$\frac{\text{固定資産}}{\text{総資産}}$	▼	79.9%	80.2%	84.6%	86.2%

【比率分析の見方】

- 人件費比率=経常収入に対する人件費割合を示す比率で低い方が望ましい。
- 人件費依存率=学生生徒等納付金に対する人件費割合で一般的には低い方が望ましい。
- 管理経費比率=経常収入に対する管理費用の割合で低い方が望ましい。本学では特に節減に力を入れている。
- 借入金等利息比率=低い方が望ましい。本学は平成30年度に完済となり、借入金は無い。
- 事業活動支出比率=人件費や管理経費、教育研究経費などで消費された比率で低いほど安定し自己資金は充実する。
- 基本金組入後収支比率=「事業活動収入-基本金組入額」に対する事業活動支出の割合で低い方が望ましい。100%を超えると支出超過。
- 固定資産構成比率=総資産に占める固定資産の割合で低い方が望ましい。比率が高くなる場合は流動性に欠ける。

※芸術系平均値は、日本私立学校振興・共済事業団【今日の私学財政】令和4年度版より算出しました。

項目	算式	評価	令和2年度	令和3年度	令和4年度	芸術系平均値
総負債比率	$\frac{\text{総負債}}{\text{総資産}}$	▼	7.8%	8.6%	9.5%	10.9%
補助金比率	$\frac{\text{補助金}}{\text{事業活動収入}}$	△	6.7%	7.5%	6.9%	10.3%
基本金組入比率	$\frac{\text{基本金組入額}}{\text{事業活動収入}}$	△	8.6%	18.5%	45.8%	12.6%
基本金比率	$\frac{\text{基本金}}{\text{基本金要組入額}}$	△	99.8%	100%	99.6%	97.7%
教育研究経費比率	$\frac{\text{教育研究経費}}{\text{経常収入}}$	△	43.2%	36.1%	37.0%	34.7%
学生生徒等納付金比率	$\frac{\text{学生生徒等納付金}}{\text{経常収入}}$	△	86.4%	84.7%	83.3%	78.9%
減価償却額比率	$\frac{\text{減価償却額}}{\text{経常支出}}$	-	14.4%	16.3%	14.2%	14.0%

- 総負債比率=低い方が望ましい。総資産に対する他人資金の割合、50%を超えるると負債総額が自己資金を上回る。
- 補助金比率=高い方が望ましい。私立大学等経常費補助金や競争的資金等の積極的な獲得のための取り組みが必要。
- 基本金組入比率=資産の充実のためには高い方が望ましいとされる。
- 基本金比率=基本金組入対象(教育研究用)資産の自己資金取得による割合で高い方が望ましい。
- 教育研究経費比率=経常収入に対する教育研究活動費用の割合で高い方が望ましい。
- 学生生徒等納付金比率=経常収入に対する学生生徒等納付金の割合で経常収入の中で最もウエートが高く安定推移が良い。学費のみに依存しない体制作りが重要。
- 減価償却額比率=経常支出に対する減価償却額の割合で、実質的には消費されずに留保される資金。

まとめ

令和4年度決算は、世界の経済情勢の直撃を受けた物価上昇、円安による急激なインフレの中で、経費面では近年にはない厳しい状況下となりましたが、学生寮の寮費収入も安定しました。また、学生納付金収入もほぼ予算通りとなりました。基本金組入前当年度収支差額は例年のように10億円以上の維持が出来なかったものの、収支差額比率は8.2%を維持し堅調に推移しています。今後の課題としては、継続した学生数の確保等がありますが、安定した大学運営と施設設備計画の実行が可能な状態となっています。

会計・事業報告につきましては、右のQRコードからご覧いただくことができます。



多摩美術大学 TUB



“まじわる・うみだす・ひらく”をコンセプトに、オープンインベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー5F (東京ミッドタウン・デザインハブ内) | 11:00~18:00 | 日曜・月曜・祝日休館 | 入場無料

11/20 (月) - 12/24 (日)

Tama Design High School

11月20日~12月24日、東京ミッドタウン・デザインハブにて、デザイン教育プログラム「Tama Design High School」を開催します。デジタルによる急速な社会変化、社会的な課題への向き合い方など、一人一人が主体的に考え、創造的な力を身につけることが求められています。今までデザインに触れていなかった方を対象に、新しいデザイン教育をお届けします。2021年に立ち上げたヴァーチャル大学「Tama Design University」の第3弾としての企画です。



12/4 (月) - 24 (日)

TUB Showing

多摩美術大学在校生対象の公募型企画展「TUB showing 2023」を開催します。学年、学科、ジャンル問わず、幅広く作品を募集し、その作品の中から選ばれた受賞作品を展示します。また出展者と審査員が集まる講評審査会(12月10日)を実施予定です。学科を超えた交流の場を設けております。



多摩美術大学 アートアーカイヴセンター



本学に蓄積されてきた芸術資源を保存、管理、公開していく研究教育拠点として、2018年4月に設立しました。現在18の資料体を有し、授業での利用や、学生のみなさんの制作や研究に役立てる生きた教材とするため、各種資料を整理してアーカイヴを構築しながら公開しています。アートアーカイヴセンターウェブサイトにて利用方法や動画などのコンテンツをご覧ください。

11/23 (木・祝) - 12/9 (土)

多摩美術大学アートアーカイヴセンター所蔵 秋山邦晴資料・勝見勝アーカイヴ芸術学科アーカイヴ設計ゼミ 授業利用展示「日本万国博覧会資料展」(仮称)

アジアで初めて行われた大阪万博EXPO'70には、当時の日本を代表する建築、音楽、美術のアーティストたちが結集し、大きな成功を収めました。アートアーカイヴセンターは、現代音楽のプロデュースに深く関わった秋山邦晴(1929-1996)、デザイン面で指揮をとった勝見勝(1909-1983)の資料を所蔵しています。これらを整理し読み解いて、芸術学科アーカイヴ設計ゼミのメンバーが知られざる大阪万博を展示、紹介します。

会場=アートテーク2F アートアーカイヴセンターギャラリー
10:00~17:00 | 日曜日休場 | 入場無料

12/2 (土)

第6回 多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム「資料のデータ公開と著作権」

第1部「AACショーケース2023」では、本年度の研究結果、所蔵資料展示、授業展示など本センターの活動を紹介いたします。第2部のテーマは「資料のデータ公開と著作権」。近年アーカイヴ資料のデータ化は急速に進み、ウェブ上での公開も求められています。データ化された資料の著作権は、それぞれの現場でどのように扱われ、守られているのでしょうか。実務について情報を交換し、議論します。

登壇者= 内藤廣/光田由里/高橋庸平/加藤勝也/石田尚志/石原友明/川口雅子/木村剛大/小泉俊己/建島哲/千々岩修

会場=八王子キャンパス レクチャーAホール
13:00~17:30

※プログラムの詳細や事前申込については、AACのウェブサイトをご覧ください。

アートテークギャラリー



八王子キャンパス内 | ギャラリー開場時間10:00~17:00(展覧会による) | 日曜・授業日以外の祝日休場 | 入場無料
最新情報は大学HPでご確認ください

11/11 (土) - 25 (土)

吉村純一退職記念展「ランドスケープデザインって?」

※休場日: 日曜、18 (土)

11/13 (月) - 12/9 (土)

高橋士郎 自由の気膜

※休場日: 火曜、日曜、11/18 (土)、12/2 (土)

※開場時間は11:00-17:00

アキバタマビ21



アキバタマビ21は、3331 Arts Chiyodaでの約12年間の活動を終え、現在移転準備中です。移転までの間、いろんな場所をお借りして、アーティストトークや展示設置にまつわるワークショップなど、さまざまなイベントを開催しています。

11/15 (水)

アーティストと本3

対談「生活の表現と本」

登壇者= 安達茉莉子、喰田佳南子

会場: 紀伊國屋書店新宿本店3階アカデミック・ラウンジ



EXHIBITION & THEATER

7/15 (土) - 12/3 (日)

ポーラ美術館 展示室1、2、3、アトリウム
ギャラリー

シン・ジャパニーズ・ペインティング
革新の日本画 横山大観、杉山寧から現代の作家まで
日本画・長谷川幾与 非常勤講師

10/21 (土) - 12/10 (日)

川越市立美術館

〈川越の美術家たち〉中村一美展

油画・中村一美 教授 (2023年度定年退職予定)

10/27 (金) - 2024/2/25 (日)

ヤマザキマザック美術館

レトロ・モダン・おしゃれ

杉浦非水の世界

杉浦非水 初代校長

11/3 (金) - 19 (日)

山形美術館

ゼロ「から」の絵画 木嶋正吾展

油画・木嶋正吾 教授 (2023年度定年退職予定)

BOOK



建築家・内藤廣 Built とUnbuilt 赤鬼と青鬼の果てしなき戦い
内藤廣 著 (学長) グラフィック社
10月10日刊
4,290円 (税込)



現代陶芸論
外館和子 著 (リベラルアーツセンター教授)
阿部出版
6月30日刊
2,970円 (税込)



悩みを手放す21の方法
折野俊明 著 (名誉教授)
主婦の友社
6月15日刊
1,650円 (税込)



井筒俊彦 起源の哲学
安藤礼二 著 (芸術学教授)
慶應義塾大学出版会
9月9日刊
2,750円 (税込)

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。

メール (news@tamabi.ac.jp) あるいは右のQRコード「Activity News 情報投稿フォーム」からお知らせ下さい。



Tama Art University

多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2023年10月31日発行 第32巻 第2号 通巻95号
発行: 多摩美術大学 広報部 東京都八王子市鎌水2-1723 電話: 042-676-8611 (代表)

